

田中 敦子 「大切なすみか ～ 沖縄の海と地球～」



筆者は右から二人目

10数年前から、「気候がおかしくなっている」と私は感じてきた。夏の紫外線、熱射の強さで洗濯バサミの劣化が早くなり、肌はひりひりとすぐに反応し出す。年々ひどくなっているように感じる。夏は長く、秋はあっという間に過ぎ、庭のもみじがあまり紅葉しないうちに枯れることもあった。日本の四季のイメージが変わってきているように思える。

2010年、この夏、熱中症で倒れる人や死亡する人がニュースになる日が続いた。集中豪雨や雷、災害の少ない岡山でも竜巻の注意報まで出された。私たちの身近な日常にまで「地球環境の悪化や危機」を感じさせることが増えてきたように思う。目を背けようにも、背けられない現実、「なんとかしなくてはいけない」という気持ちが生まれ、強まる。同じように思っている人は多いのではないだろうか。

田中 敦子 氏

生活協同組合 おかやま
コープ全体理事。
(財)おかやま環境ネットワ
ーク評議員。

おかやまコープでは、4月から「もずく基金」を始めている。沖縄産味付けもずくを買えば、1パック当たり1円から2円の募金が沖縄県恩納村漁協におくられ、沖縄サンゴの再生事業に活かされる。私はその活動を見学しに2月に沖縄を訪問した。



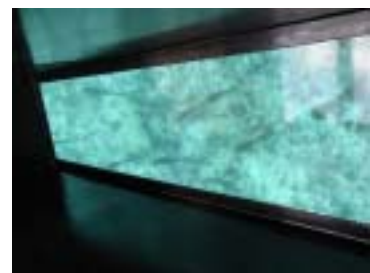
陸上のプールで育てるサンゴ

沖縄に行って、まずびっくりしたのは、グラスボートに乗って、海を覗いたときのことだ。サンゴの白い死骸がまるで骨のように海底にごろごろところがっている。1998年と2002年に沖縄周辺の海水温が2度上昇した結果、サンゴの大規模な白化現象が起こり、危機的状況を招いたのだった。現在、サンゴの生息数は10年前の1/10から1/20に減っているという。日本サンゴ礁学会では、「沖縄のサンゴ礁の現状は、研究者・行政・民間が連携して対策にあたらないければ回復が困難な状況にきている。」と指摘する。恩納村漁協が始めたサンゴの再生

にはこれまで以上にたくさんの協力が必要になっている。

地球温暖化防止に向けて、省エネや暮らしを見直すことに加えて、私たちが環境保全や再生の取り組みに参加することがとても大切になっている。一人ではたかがしれていると思いがちなことも、多くの人々が取り組んでいくと、成果や結果も目に見えて違ってくる。「なんとかしなくてはいけない」という気持ちだけでなく、私たち一人ひとりが地球を守る、大事な担い手であるという意識が環境活動への参加とともにさらに強まる。

沖縄の海底には養殖された、サンゴが育っていた。そこに魚が集まり、さまざまな海の生き物のすみかとなっている。環境を保全し再生させる取り組みはまだまだ始まったばかりである。地球という、唯一の、大切なすみかを守るかどうかは、私たち人間の、一人ひとりの意識と行動にかかっている。沖縄の海は私にそう訴えているように思えた。



海に植え付けられた養殖サンゴ